

4. 第3セッション

「放送公開講座の現状と将来像」

○総合司会

時間が参りましたので、第3セッションに入らせていただきたいと思います。

第3セッションのテーマは「放送公開講座の現状と将来像」ー総括と展望ーでございます。

司会は、菊川放送教育開発センター研究開発部長でございます。

菊川先生、よろしくお願いいたします。

○司会（菊川健 放送教育開発センター研究開発部長）

菊川でございます。ただいまから「放送公開講座の現状と将来像」、副題としまして「総括と展望」という第3セッションを始めさせていただきますと思います。

それではまず、登壇者のご紹介から始めたいと思います。最初に、放送教育開発センター教授石田幸平さん、放送教育開発センター教授多田さん。放送教育開発センター助教授廣瀬さん。放送教育開発センター助教授の濱野さん。名古屋大学教授の今津さん。民間放送教育協会プロデューサーの井出さんです。以上のメンバーでこのセッションをしていただきます。

さて、昨日から2日にわたってセッションが持たれているわけですが、この副題についております「総括と展望」の、総括という言葉はどういう意味を持つのかということを考えてみますと、昨日からいろいろ行われた研究、討議の総括という意味もございましょうし、それから、この公開講座が始まりまして既に15年、シンポジウムが始まりましてから10年たっております。その総括という意味もございましょうし、あるいは平成元年度から研究、教育を行っておりますが、その研究の総括という意味もあるように思います。

展望ということにつきましては、これから放送を利用した公開講座をどのように展開していくかを探るという意味もあろうかと思います。既に昨日から三つの分科会が持たれ、その中でいろんな問題提起がなされております。それから所長のあいさつ、記念講演等がありまして、その中にも既に幾つかの示唆があります。例えば、所長のあいさつの中では、実施する大学のローテーションを考えたいという話もありましたし、記念講演の中では、放送大学の設立の過程のお話がいろいろありまして、その中で大学の公開の必要性、あるいは公開することによる大学教育の改革、メディア利用による新しい教育の可能性を探るといったことが盛られておりました。この公開講座は、本当にその役割を果たしているのかということも考えなければいけないと思うわけです。

石田さんの方からは、公開という言葉につきまして、地域に対する公開、あるいは大学間の公開、それから公開に関する研究と、公開という言葉についてどのように考えるかということが示されたわけです。そして、きょうの第2セッションの第1分科会、第2分科会でもって、この研究、討議というものにつなげられていったわけです。

きのうの第1セッションでは、教育機能という中で、学術研究の論理と放送の論理という二つの相異なる考え方を、いかにして矛盾なく公開講座の形に結びつけていくかということで、かなり討議があったと思います。それを受けまして、今後どのようにこの公開講座を発

展させていくかにつきまして、このセッションを持つわけではありますが、午前中の第2セッションは分科会という形で会場を異にして進められましたので、まず、第2セッションの中の第1分科会と、第2分科会の方から討議内容のご報告いただきまして、その後、センターで調査研究を行っておりますが、その報告を行うという順序で進めさせていただきたいと思います。その後、討議に入らせていただきたいと思います。

それでは、まず最初に第2セッション第1分科会の討議内容のご報告につきまして、多田さんの方からお願いしたいと思います。

○放送教育開発センター（多田方 放送教育開発センター教授）

第2セッションの第1分科会についてご報告いたします。

前半は番組制作につきまして、後半は印刷教材につきまして討議いたしました。それぞれ非常に充実したご報告をいただきまして、時間が大幅に超過しました。終わったばかりで、余りよく整理されていないと思いますが、かいつまんでご報告申し上げます。

まず、前半の番組制作につきましては、金沢の佐伯先生の方から、「番組のテーマの選定について」というタイトルで、いわば番組制作の基本的な問題で、これまでの放送利用の大学公開講座のさまざまなアンケートを利用いただきまして、テーマの選定がいかに放送利用の大学公開講座に大事であるかについて、実例を示してお話をいただきました。

具体的には、地域に関するテーマと健康に関するテーマということになるわけですが、地域性の強いテーマを選定したときは、比較的受講生が少ない。健康維持あるいは保健といったものに関するテーマのときは受講生がふえている。そこから、極めて当然でありますけれども、受講生の関心に沿ったテーマに戻るべきだという結論に達したというご報告でございました。放送講座でございますから、まず番組で勝負する。わかりやすく、具体的に、専門用語を避けて放送番組をつくるのが大事ではないかという結論でございました。

次に、名古屋の今津先生の方から、ラジオ講座番組の知の構成。お手元にあるかなり詳細なレジュメに基づき、具体的な報告をいただきました。かいつまんで申し上げますと、番組の中の音声素材がどういう種類か、それがどういう効果を持つかということについて、四つの分類に基づいてご説明がありまして、その後で一つの番組を取り上げまして、オーディオテープを流して実例の説明を裏づけるという内容の報告でございました。

非常に詳しくレジュメに書いてございますので、これをお読みいただければ一番わかりやすいと思いますが、従来、こういう形の番組の分析はなかったと思います。四つの分類によって、具体的に番組を分析していくことで、かなり一般的なテーマにつながっているという印象を持ったわけでございます。

ディレクターの方たちはかなりなれていらっしゃると思いますので、無意識にうちにつくってしまった番組もかなりあると思いますが、こういう分析的な方法をとって、それを文字にしてマニュアル化して、さらにそれをある場合には参考にできるような形で一般化するという方向に生きていくのではないかという感じを持ちました。

3番目は、広島大学の若尾先生から、30分番組は、広島のアナウンス調査でもかなり好評だったようでございます。若尾先生が提示された問題は、30分という非常に短い番組が18回も20回も続いているということで、番組としての一貫性に欠けるおそれがある。番組の一貫

性ということからしますと、非常に完成度が問題になってくる。その場合の求心力ということをおっしゃいましたけれども、やはり上位概念からするまとめみたいなものがどうしても必要になるのではないか。

そういう視点からしますと、18回を二つに分けて、理論編と実践編という分け方もできますし、あるいは別々のテーマで9回、9回でつくっていくことも可能ではないかというお話でございました。これは45分から30分になると、当然こういう問題が起きてくると思いますが、番組制作の過程で30分をつくっていろいろな問題がわかってきた。そういうものを次にノウハウとして伝えていくことを考えていきたいというご報告でした。

コメンテーターの伊藤さんの方からは、放送利用の大学公開講座は、やはり放送局としては放送で勝負する以外にないということは、きのうからの一連のテーマでございますけれども、やはりいい番組をつくって視聴率を上げるという観点からつくるのが正道ではないかという、きのうのお話を裏づけるようなご発言がありました。30分番組等についてのアンケートも、かなり肯定的な意見が多かったという報告もついておりました。

それから印刷教材でございますが、印刷教材は大学が決まっております、東北大学、信州大学、大阪大学でございます。萩原先生は、ソニーのユーズという標準的なハードを入れてまして、過去3年間は、そのアウトブットの状況を提出されまして、これだけ高品質で複雑な組みができるようになったというお話が今まで続いてきたわけでございますけれども、今回は、少し歴史を振り返りまして、当初の経験からのお話をいただいて、何ゆえセンターの中で、そういう煩瑣な印刷教材の作成に取り組むようになったかということについて、かなり詳細なご報告がございました。

それから、ことしから新しいソフトで一番標準的なポストスクリプトが入るということで、かなり飛躍的に印刷教材の中身が改善されてくるのではないか。そのことは単に放送利用の大学公開講座だけではなくて、開放センターが抱えている東北全域、あるいは仙台等のほかのいろいろな開放講座の教材づくりに非常に役に立つのではないかというお話がございました。全くそのとおりでございまして、できれば今後は、ポストスクリプトによって上がってきた成果というものをまとめて、ここでご報告されることを期待しております。

信州大学は、私からご報告するまでもないんですが、60年から講座に参加されまして、現在までに16冊ぐらい印刷教材をつくっていらっしゃる。これがほかの大学と違いますのは、全部民間の出版社とタイアップしてつくったものでございます。東京の一流出版社もございまして、地方の出版社とタイアップしたものもございまして、いずれにしても、非常にきれいで読みやすい印刷教材に仕上がっております。印刷教材というよりも普通の図書でございます。

宇和先生の方からは、印刷教材を市販することについてのメリットと申しますか、人の目に触れるわけですから完成度が高くなる。あるいは一度出しておけば2次利用ができる。この講座だけではなくて、ほかのいろいろな講座に使える。それから、講師にとっても手元に置いておけるというメリットがある。さらに、内容的にいろいろなところからリアクション、評価、反響がある。それから部数等を心配なくていい。いわばリスクは出版社に負わして、書店にも並ぶようになりますし、宣伝もテレビ、ラジオで可能であるというような意味で、

印刷教材を市販することについて非常にメリットが大きいと思うというご報告いただきました。

私、去年のシンポジウムで申し上げましたけれども、全く同意見でございまして、そういう大学と出版社との接点、いろいろな折衝の過程とか問題点とかがありましたら、これだけの経験があることですから、まとめていただいて、同じような市販の道をとりたいという、ほかの大学の参考になるマニュアル的なものをつくっていただくと、大変いいということを感じました。

大阪大学は信州大学と並びまして、歴史的には一番市販が多くて、しかも非常にきれいな版型で、中が非常にしゃれた、いい市販教材をつくってこられた。ことしは、どういうわけかテレビ、ラジオとも市販されておりません。大村先生の方から、ちょっとテーマが分散して、ことしはできないというお話がありましたけれども、その理由としましては、受け持つ学部とかがローテーションをやっているぐるぐる回ってしまう。運営委員会の方も変わるということで、ノーハウの蓄積がしづらにおっしゃいましたけれども、過去にこれだけの実績があるわけですから、信州大学と同じように、市販のためのノーハウみたいなものをどこかでおまとめいただければ、ほかの大学の方に大変役に立つのではないかと感じました。

そういうことで、きょうは番組制作、印刷教材、かなり具体的に絞った形で報告がありました。

時間が超過して、一部にはちょっと問題外になったかと思いますが、充実した分科会でございました。まとまりが悪いですが、大体そんなところでございます。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

それでは、第2分科会の方のご報告を石田さん、お願いします。

○放送教育開発センター（石田幸平 放送教育開発センター教授）

各大学について申し上げることは控えさせていただいて、どういうことが問題になったかというふうにまとめたいと思います。

これからの研究ということに主眼を置いてお話しりたいということで、前もってお願いを申し上げておりましたので、そこで出てきた問題は、例えば私どもは大学群というのをやっておりますが、大学群の中での共同研究、それは北大と新潟大、熊本大と岐阜大というような形ではなく、大学郡内での共同研究、そういうようなものとして研究が充実するのではないという問題と、それから従来の共同研究でも、大学間についての連携ができて非常によかった。それを推進すべきである。そういうことで地域と学問の問題、いろいろ研究ができるのではないか。大学郡内での共同研究というのは新しい方向ではないかと思われます。もちろん、たくさんの大学と一緒に共同研究するというのも新しい試みではないかと思われます。

それから、受講料を取って講座をやっていくという試みはかなり定着してきております。そこでもスクーリングを活性化するというので、いろいろな研究、工夫がなされてきている。例えば、スクーリングの日に実技指導をする。そういったことがどういう効果があるか。

そういうことの研究についてもご報告がありました。これが受講生サービスと、受講生拡大に関する研究テーマのところで出てきたテーマですが、コメントのところで、一般の人たちに対する内容はどうかという研究も取り上げられました。

後半が、大学の授業への活用ということがテーマで、それについて、各大学のいろいろな実情と研究の方向が出されました。割合活発に出たように私は思います。例えば、もうテキストがなくなってしまうと、ビデオとかテープという教材を利用して、学生にどう効果的な授業をするかということで、必ず言語化させるという試み。平たく言えば、作文を書かせるといったことで学習効果を上げていく。そういう研究も今後重要ではないかと思います。つまり、この放送公開講座は年々やっておりますから、古くなった分についてどうするか。古くなったテープの大学の授業への活用はどうするか。それから、学生にテープを貸し出すようにする。そういうことで、授業はどういうふうにやっていけばいいのか。

それから、先ほども出ましたが、教養課程としての評価と専門課程としての評価。教養の授業としていいのか、専門課程の授業としていいのかという評価の問題。あるいは印刷教材だけで授業はできるのか。それとも逆に、ビデオなど放送教材だけで授業はできるか。どういうテーマであれば授業に活用できるか。それからフロアからも、地域性と学問性の問題はどうかというご意見が出てまいりました。

最後に、放送教育開発センターと新潟大学の共同研究で、従来にないことを研究してきているわけです。つまり、この放送公開講座に参加していない大学も含めて授業に活用してもらう。それがどのくらい効果的であるかという研究が始まったばかりであります。いわゆる非参加大学がかなり積極的に活用しているので、どのくらいの大学でそういうことが活用できるか。その授業についての研究をやるべきではないか。

それから、せっかくの費用をかけているのであるから、共通教材研究。例えば五つの大学、あるいはある専門の関係の学部が集まって、共通教材をつくっていくような開発の研究をしたらどうか。今までの中間報告でありますけれども、それについても各大学は非常に熱心に要望しているということ。そういう中で教官も交流していくことが必要で、その面での研究も必要であるということでありました。

もう一つ重要な研究としてご提案があったのは、放送局は、大学への授業利用、授業に活用するというテーマについてはほとんど研究してきていない。放送局は、大体一般向きの番組を制作するということを念頭に置いてきているけれども、今後もっと研究する必要がある。どういうことかと申し上げますと、やはりいい番組というものは、主任講師の情熱というものもありますが、その主任講師がどのようにして研究のプロセスを歩んできたか。その人間くささが大学の学生にも好評だし、一般の人たちにも好評なので、一般の人たちにも学生にも向くのは一体どういうものなのか。実験的に、例えば民教協と大学側とがどういうふうに接し、どういうことを、どう選んでいくか。これはテキストもみんな含まれると思いますが、そういった研究が必要なのであって、今までの大学間だけの研究ではなくて、放送局と大学もチームをつくって検討することが必要なのではないか。

それから当然ながら、複数大学による研究チームをつくっていくのが重要なのではないかという、多くの実のある提案があったように思います。各大学の先生方には、こういう報告

ではちょっと足りないと言われるかもしれませんが、時間の都合上、一応そのようにまとめさせていただきました。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

いろいろな問題点、今後の取り組み課題が指摘されたようです。基本的には、放送というメディアを使って、不特定多数の方に大学の教育内容を公開するという場面と、大学での授業にそれをどう活用するかというところですね。テーマの設定の問題や番組のつくり方、構成等、あるいはその番組の評価、その観点も異なるでしょうし、授業の場面での教材の生かし方をどうするか。いろいろな問題があると思います。

それから、教材を共同で開発するというのも、それをどういう仕組みでやっていくか。今の仕組みでいいかという問題もあったのではないかと思います。いろいろな観点があるわけですから、これは後の議論でまた考えられると思いますので、とりあえず調査研究の報告をまとめてお伝えしたいと思います。

○放送教育開発センター（廣瀬洋子 放送教育開発センター助教授）

私ども放送教育開発センターでは、過去4年間の大学公開講座に参加した15大学に向けて、昨年の秋に調査研究についてのアンケートという質問をいたしました。アンケートと申しましても自由記述式で、成果が上がったと思われる事柄、そして、反省すべき事柄を箇条書きに書いていただくという趣旨で行いました。

皆さんからご回答をいただいたんですけれども、中には、私たちの意図する調査研究についてのご質問を誤解なさって、テーマそのものについてお書きになっていらっしゃる大学もございました。必ずしも我々の意図が伝わったかどうか不安ですけれども、その中で幾つか共通の問題点が浮かび上がってまいりましたので、それをここで簡単にご紹介させていただきたいと思います。

まず、今までの調査研究では、受講生サービス、印刷教材のあり方に関する研究、大学授業への活用、番組制作に関する研究を四つの柱としまして、各大学へ具体的に調査研究を行っていただいた。

まず、この放送公開講座が抱えている大きな問題点もございますけれども、毎年の授業内容、つまりテーマが変わるわけで、それに伴って先生方も交代いたします。そうしますと、いろいろな人的、内部的なものが変わりますので、こうした調査研究がそのときなされても、次の年度に、果たしてその調査が生かし切れるか。継続的にそれを活用していけるかという問題が、どこの大学でもあるように見受けられます。

ただ一般的には、一般の生涯教育への関心、意識の向上があった。また、学内での講座授業に対する認識を深め、教官の番組制作への理解を深めたという前向きのご回答が多かったんですけれども、ここで気づいた点を2～3申し上げますと、特に受講生サービスのところで、新潟大学と北海道大学が双方向はがきという、マスコミュニケーションの一方的な方向性を克服して、受講生に親近感を与えようという形で、受講生が担当講師に双方向はがきを書いてもらって、お互いにやりとりするというのをなさったんですけれども、これは非常に受講内容を深めるのに効果があったと思います。受講生が担当教師や講座そのものに親近感

を得たというプラスの面があった反面、これは大変主任講師に対しての負担が大きくなる。例えば北大の場合ですと、ラジオでは250通、テレビでは250通のおはがきが来て、それに一々担当講師の方が返事を書いている。担当講師の方は、前年から授業の教科書をつくることにも参加なさっていらっしゃるわけですから、これに当たった先生方は、この2年あるいは3年の間、ご研究がほとんどできないという事態になる。ですから、その受講生サービスといったもの、あるいはスクーリングを含めて、ある1人の人、あるいは主任講師への負担をいかに軽くするか。そういったことがこれから求められるのではないかというご意見もございました。

例えば、共同研究者をつくっていかないといけないのではないかな。そしてまた、この調査研究にも労力が非常にかかるので、これも単に受け持った先生方だけが抱えるのではなくて、ほかの大学と一緒にあった調査グループみたいなものをつくった方がよいのではないかと、うご指摘もいただきました。

それから、先ほども申しましたように、調査結果が翌年、また翌々年と生かし切れていない。そういう縦のつながりというか、時間的なつながりを、いろいろ変わる講師の方たち、またテーマも変わりながら、いかにそれを継続的に位置づけていくかというのが、この放送講座の大きな問題点だと思います。

それから、先ほどにも関連いたしますけれども、とにかく担当講師が多忙で、みんななりたがらない。担当講師になっていただくために、放送講座の意義を説明したり、いろいろな形で説得するわけですが、何かそこでいいお知恵はないものか、これも今後皆さんのご意見を伺いたいと思います。

それから、印刷教材に関してですけれども、先ほど多田先生からご指摘がありましたように、印刷教材を、市販できる教科書あるいは教養書として仕立てようという動きが信州大学や大阪大学で出ております。ただ、この場合、出版社とのやりとりとかノーハウ、どうやって市販化していくかといった細かい経緯は、講師の先生方の個人的経験の深さや、人的なつながりから始まる部分が多くて、こうしたノーハウを、公開講座全般の知識の蓄積としてつくっていった方がよいのではないかな。これは、いろいろな大学に生かされるのではないかなという気がいたしました。

それから、東北大学がデスクトップ・パブリッシングをご研究なさっているんですが、市販化していこうという動きの中では、この東北大学のデスクトップ・パブリッシングというのは、随分違った逆の方向に向いているという点では興味深かった次第です。

授業の活用については、それぞれの大学でいろいろご苦労なさっているということが、アンケートからも浮かび上がってまいりましたけれども、やはり講義の利用については、組織的な取り組みが不十分であって、各先生や各講座、それぞれがそのときにアドホックになさっているという感じがあって、もう少し組織的な取り組みを全体で考えていけたらいいのではないかなという気がします。

まとめますと、担当講師にかかる負担の大きさをどのように軽減していくか。それと同時に、受講生サービスをどのように深めていくか。1人の人、あるいは非常に少ないメンバーの方たちに重荷になるというのでは、これからの全体の発展は難しいのではないかな。これが

考えなくてはならない1点。

それからもう一つは、やはり調査研究を毎年毎年積み上げても、次の年にそれを生かしているか。また、それを生かす形で番組づくりがなされているか。これも大学によっては、熱心な先生が毎年おやりになっている場合もございますけれども、担当が変わってしまうと、また一からといったことも往々にしてあるようなので、こういう継続性の2点が、今後の調査研究、ひいては大学講座に関する重要な課題だと思います。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

これで一応総括の部分は終わったわけでございます。今から相当数時間がございますので、討論に入りたいと思います。先ほど討論の時間が短いのではないかというご意見があったそうですが、ぜひ活発にご討論いただきたいと思います。

せっかくこういうセッションが設けられているわけでありますので、今後公開講座を進めていく上で、今までを総括して、ぜひこういう問題に取り組んでいくべきだという課題があると思います。もし具体的にそういうご意見がございましたら、まずここでお出しいただいて、それをどのように深めていくかという方向で討論していきたいと思います。自由にご意見をいただきたいと思います。

センターからアンケートをいたしまして、北大の阿部先生、名古屋大学の今津先生のお二方から、こういう取り組みをしてはどうかというご意見をいただいております。まず、阿部先生の方からご意見をちょうだいしたいと思います。

○北海道大学（阿部和厚 医学部教授）

センターに出したまとめとは別に、今回聞かせていただいたものもまとめて、2～3申し上げたいと思います。

まず一つは、先ほど視聴覚教育を体系づけて、この放送講座の成果を大学の教育に生かしていくという方向づけがなされたわけですが、それに関して、もう一つ問題だと思えますのは、今までたくさん教材はできているんですけども、実際に体験した先生方はそれほど多いわけではなく、ごく一部です。そういう人たちは理解しているんですが、大学全体としては、まだ視聴覚教育がぴしっと、個人個人のレベルに入っていっていないと思うんです。

そのために北大では、個人レベルでそういう視聴覚教育、要するに、今まで授業で皆さんやっているように、スライドをつくる感覚で視聴覚教育の教材をつくれないうという発想を持ちました。そして非常に手軽に、自分の机の上でできるようにということで、8ミリのビデオセットを2台買いました。編集そのほか、全部セットを用意しまして、まず、どうやってつくるかというレベルで、わかりやすいマニュアルをつくらうと思っています。場合によっては、放送局の人たちにも協力いただいて、もう少しプロフェッショナルに近いようなづくり方もやりたいと思っています。

そういうことでマニュアルをつくりまして、後は、全学の教官全員に配って自由に使える形にしたいと思います。そういうことで、個人レベルから視聴覚教室の根が広がる。そして、大がかりにつくった視聴覚教育の教材も、さらに取り入れていく素地ができていくという方

向づけがあるのではないかと思います。実際に、その教育セットはもう用意しましたので、これからそれを一つのテーマにしようと思っています。

それから、授業への活用の中で問題だと思いますのは、実際に大学放送講座は、一般の視聴者、一般市民を相手にしてつくったものです。ですから、つくる側のある目標はそういうふうになっています。それから受講生という人がいるわけで、あと大学では、一般教養のレベルで活用しようとか、専門教育の方で活用しようということがあると思います。ですけれども、実際に教育の現場で、特に単位化その他を考えますと、例えば、受講生はどこまで到達すれば、それを受講したと認められるのか。それから、一般教養の学生がどこまでわかったら単位として認められるのか。専門のところではどうなっているのか。そういった受け手側の目標を明確にしなきゃいけないと思います。それによって、成績はこうだから単位として認めようという受け手側の評価基準、実際のビデオの作品の評価ではなくて、受講者の側の評価基準をきちっとする必要があると思います。

それから、先ほど継続性のことがありましたけれども、私どもは、今までの10年間の流れ、例えば教材のつくり方とかラジオ番組のつくり方、テレビ番組のつくり方、大学放送講座をどうやってつくるかをマニュアルにまとめました。これは毎年改定していこうと思っています。そしてこれを、新しい講座を始めるときに、全員を集めて決定するという格好で、番組それぞれはみんな新しい人が来るとお思いますので、そういう形で継続性ははっきりできるとお思います。

○司会（菊川）

ありがとうございます。

先ほどの第2分科会の方でも、大学の授業に教材を活用する、教育の方の教材活用能力が問われるのではないかという話もあったわけです。今の阿部先生のお話でも、教員自身が教材を自分でつくったり、あるいはビデオ編集したりすることによって、教材を利用していく活用能力が高まっているといったお話があったわけです。

それから、一般市民向けに実際教材として活用する場合に、それを単位として認める場合の専門生、その辺の問題が問われるということもあると思うんです。先ほど、第1分科会の方で、東海ラジオの伊藤さんが、聴取率を高くすることが非常に大きな問題だと発言をされたと記憶しているんですが、聴取率を高めるということと、専門性が高まるということとは完全に相反するものなんでしょうか。

伊藤さん、いらっしゃいましたら。

○東海ラジオ（伊東英太郎 報道制作局プロデューサー）

確かに相反する部分があります。NHKでは、聴取率の低い番組ほどいい番組だという話がございますけれども、やはり聴取率をある程度稼ぎませんと、現象的にこういうことがあるんです。例えば、朝、音楽の番組なんかだと1.何%とか稼ぐんですが、その後、放送公開講座が始まって0.何%にすんと落ちると、次に立ち上がれない。そこでスイッチをよそへ切りかえられてしまう。あそこであの放送をやっているから後がだめになるという現象が起こることは、民放の中でどなたもご経験になっていると思います。

ですから、少しでも聞きやすい番組、たくさんの方に聞いていただける番組にしたい。し

かも、学術的なレベルはそんなに落としたくない。これは確かに非常に難しい問題だと思います。そのせめぎ合いみたいなところで、なるべく私どもとしては、たくさんの方に聞いていただける手法を持ってやりたい。放送技術上のテクニックまで含めて、第1分科会の方では、どうすると聞きやすくなるかということについて、今津先生のご発表もありましたけれども、そういうこともいろいろ研究しながらやっていきたいと思っております。

私自身の経験からいきますと、第1回に始めたときは、ほとんどの先生が1人で45分棒読みでした。けれども、だんだんと変わってきました、この研究集会に出していただいた成果で、例えば第1分科会でも言ったんですが、教員会が終わった後に、講座を担当してくださる先生方に残っていただいて、どこどこ大学ではこういうやり方をしています。どこどこ大学の放送はこういうふうですということをお話しします。それぞれのテーマと、その先生のキャラクターでどういうふうにも対応しますから、日曜日に行ってくれとおっしゃれば、日曜日も出ますし、夜でも昼でも朝でも行きますから、言ってくださいということを申し上げて、少しでも聞きやすい番組にしたいというふうに努力してまいりました。

先ほど言いましたように、よくて、すっとんと落ちると、立ち上がるのが大変という部分もありますし、それよりも、少しでもたくさんの方に聞いていただきたいということがありますので、聴取率の高い番組にしたい。つまり、たくさんの方に聞いていただける番組にしたいという気持ちは非常に強くございます。

以上でございます。

○司会（菊川）

きのう、中国放送の方ですか、三つ口のラジオの例のお話をされた。私は、あれを聞きまして非常にショックを受けたといいますか、ラジオというのはすごい能力を持っているなと思いました。実際のテレビでは絶対に扱えないような内容ですが、ラジオで非常に効果的に使っておられる。素材としてのよさを感じるわけです。

先ほど生田先生の方から、一般向けにつくられた教材を専門の教科で使う場合に、扱う科目によって専門になったり、一般になったり、あるいはその中で教師つきで、教師が解説しながら教材を使う場合と、丸々そのままを見せてその授業を成立させる場合と、いろんなケースがあると思うんですが、その教材に盛られた素材と、実際に使う教育のやり方の問題ですね。その辺の関係は、かなり専門性と一般性といったものの間を埋めるかぎになりそうな気がするんですが、生田先生、その辺も含めてご意見をお持ちであれば。

○新潟大学（生田孝至 教育学部教授）

大変難しい問題を菊川先生からいただいたんですが、これからのあり方で言うならば、私たちが今開発しておりますのは、どちらかというと一般向けに、大学の専門的な内容を公開していこうという姿勢だろうと思います。ところが今回、幾つかの大学で視聴していただいた中では、やはり対象によって、同じものでも受け取り方が違うということが、かなり鮮明に浮かび上がってまいりまして、これから各大学が専門性を生かして、これを高等教育の教材として活用していく場合には、やはり一般性もさることながら、もうちょっとどういうレベルでその専門的なものを開発していけるのか。

今は一般の大衆を対象にするということを前提にして開発しているかもしれませんが、も

うちちょっと先には、対処をもう少し区分けしながら、そこに応じた形での専門性も含め、あるいは一般性も含めたものを、多様あるいは多層的に考えて教材を開発していく必要があらうと、菊川先生のご質問に答えられたかどうかわかりませんが、そういう印象を持っています。

それから、今やっております共同研究として、やはり共同研究体制をもうちょっと強化していく必要があるのではないかとことを痛感しております。放送教育開発センターは共同利用機関でございますので、基本とすべきではない共同研究、よく所長さんが「研究の事業化、事業の研究化」ということをおっしゃっているわけですが、そういう形で今進んでいるかなという。私も最初からかかわっている者として自己反省して感ずるんです。

例えば、廣瀬先生が今アンケート調査でる申されましたことに尽きるところがあるんですけども、今まで毎年やってきた研究の成果というものが次年度に生きていない。これは本当にそう思うんです。ところが、廣瀬先生はそういうご指摘をされるんですが、じゃ、それはどこが、だれがやるのかということです。私は常に申し上げているんですけども、自分の大学の中では、事務官もかかわる、教官もかかわる、しかし、この体制が続くシステムはどうあるべきなのか。これをそのままこのシンポジウムに置きかえていけば、全国で各大学が大変苦勞してそれぞれいいものをつくり上げているわけですが、それはその大学でとどまっていて、悩みもそこで終わっているわけです。それを横につないでいって、研究的にそれを発展させていくシステムのあり方を、どこかで研究体制としてつくり上げていく必要がありはしないか。

そうでないと、きのうも出ておりましたけれども、例えば「知の構成」という大変すばらしい今津先生のご発表があったわけですが、これにもかかわってきますが、私どもが開発してきたものがどういう部分で知の構成として極めて優秀に継続ができたのか。どの辺が難しいのか。そういうことについても、10年間サーベイしたものは一つもありません。私はそれを開発センターが中心になってやっていただきたい。問題点を指摘するだけではなくて、やはり研究体制としてそれを今ここで束ねていただきたい。

つまり、私たちは毎年毎年一つずつテーマが違って、苦勞して終わるわけなんです。そこを、ぜひ横につながる、束ねるシステムというものをやっていただいて、何年前でしょうか。私どもに言われて四つのテーマを掲げたわけですが、それにのっとって走ってきた研究の集大成がどこにあるか示してくれと言われると、なかなか示せない。それはどうしてかという、確かにやってはいるけれども、それを束ねるところが研究の路上のシステムとしてかなり薄かったのかなと。

北海道大学の共同研究でやったわけですが、最初のころ濱野さんにかかわってやっていただいたんですが、そういう体制がここのところずっと落ちてしまっているんじゃないか。開発センターと、それから個々にかかわる大学の共同研究体制というものをぜひテーマごとに絞って、基本的な各大学がやっているものを束ねていく。そこに入り込んでいったなら、横に束ねていくものをぜひやっていって、この研究、シンポジウムの知の構成をやっていくような視点が私は欲しいなと思っています。ちょっと言い過ぎたところがあるかもしれません。

以上でございます。

○司会（菊川）

センターにとって大変痛いご指摘をいただきまして、まさにそれは我々も痛感していたものでございます。このセッションでいろいろちょうだいしましたご意見につきまして、センターでは5日にすべて取り上げまして、今後どのような共同研究を組み立てていくか、石田先生を中心に検討会を開こうと予定しております。ぜひこの際、ご意見をちょうだいしたいと思います。

○信州大学（丸地信弘 医学部教授）

先ほど討論なき集会だと、午前中に発言した一人でございます。したがって、この場では、今まで30分ほど討論が行われた流れを自分なりに理解して、それをフォローするような意見を具体的に申し上げたいと思います。

確かに、専門の問題と教育の問題、教育と研究の問題、それから専門と一般の問題という話が出ているわけですが、これは、我々が物事を分析的に見ようとするから、そういう錯覚が起きるだろうということを一番始めに申し上げたいと思います。私たちのきょうの集まりは、放送公開講座で、開かれているんですから、言ってみれば民主的である。みんなが主体的に参加して、組織化して、ある目的に向かうということが一番の共通基盤だと思うんです。そのために私たち、多くの場合は大学人ですが、自己の評価を高めるために、放送公開講座を通してみんなで生涯研修をやっていると思うんです。そのことが中心であって、あくまでも該当者、対象者の話はその部分でかわってくると考えた方が話がわかりやすいと思います。その意味合いから、私は、一つ具体的なことを申し上げたいと思います。

私どもは公衆衛生をやっていますので、皆様方とも関係のある今日のテーマを取り上げてみたいと思います。エイズの問題です。今国際的にも国内的にも非常に騒がれております。どうでしょう、皆さん。ごく最近まで日本のマスコミ並びにそのほかでは、エイズを疾病の問題として取り上げてきて、それを排除するかのような形に我々を追いやっていたのが実情だと思います。これは専門家の発想で、疾病を中心に扱っていますから、そこに人間、社会、どうしようというみんなの思いを結果的には無意識のうちに排除していた。

しかし、日本でも去年のエイズデーあたりから、エイズをとめようと言われてきております。これは、みんなが主体的に参加してどうやって組むかということが中心であって、一般的な言葉でいえば、保健医療や福祉が連携するということだと思うんです。これは先ほどの先生が一番最後に言われた、どうやってモニタリングを図っていくのかということだろうと思います。

実はそういう共通の目的に向けて、みんなが力を合わせていくという前提の中において初めて、我々がある種の専門家として、分担として能力を発揮するということであって、専門性が先に出てしまうというのは、四輪の自動車であれば後輪の方で、バックする形になってしまうわけですね。一番大切なのは、やはり関係者が的確にハンドルを握って、そして一般というのは前輪の車軸だと思うんです。それを組織化することが適切なわけです。それによって初めて安全運行もできるし、我々が目的に向かって目標を達成できると思うんです。

そういう意味合いで、今の事例からのお話でかなりの方はわかりいただけたと思うんで

すが、やはり私たちに一番重要なのは、こういう機会を通じて、今ように言えば、発想の転換を図る、パラダイムをチェンジする。変えるだけではなくて、新しいパラダイム、それは社会が要求しているパラダイムに沿うことを中心にして、今までの専門性、科学性を部分に入れて、実際に実証するときに数量などを部分に使うのであって、それがひとり歩きするような従来の統計学的な発想というのは、相当考えなきゃいけないということを私は発言したいと思います。

以上でございます。

○司会（菊川）

ありがとうございました。ほかにどなたかございませんでしょうか。

○広島大学（若尾裕 学校教育学部助教授）

先ほど来、担当講師、主任講師の負担の問題と研究のフィードバック、それから、ほかの先生から出された企画をやり、番組をつくり、しかも調査研究をやりという体制が、非常に大変な中でやっているということがありました。実は、きょういろいろな方の意見をお聞きしまして、一番共感を覚えたのは大阪大学の先生がおっしゃったことで、まさに我々のところもそうだなと思って非常に共感を覚えたわけです。

各大学で取り組み方はてんでばらばらで違っていると思いますし、そういうことがスムーズに比較的やりやすくやっているところと、そうでないところがあるように思います。大学の自治の問題がありますし、我々も大学の中の一員でありますので、大学の中のやり方というものの中でやっていかないといけないという問題を抱えています。

そこで、こういった問題について、どういうふうな運営の仕方がいいかということについて、例えばセンターと、幾つかの大学の代表者が集まって協議をするというか、一種のそれについての研究をしてみるなんていうことをやっていただければ。例えば、私が大学の一員として、こういうふうなことをやりたいんだけどと言ったときに、やはり非常に限りがあるところで、一種のガイドラインのようなものが出れば大変ありがたいと考えております。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

この公開講座の自己点検、自己改革もやらなければいけない時期が来ているかもしれませんね。

ほかにどなたかございますでしょうか。

○北海道大学（阿部和厚 医学部教授）

専門性ということで一つ補いたいと思います。

実際私がやっている例ですけれども、専門科目の中で教材を生かすというときに、今までの話は、どちらかというと、放送講座でつくった教材に授業を合わせていく、どうやってそれを生かしていくかという方向ではないかと思うんです。実際に専門の中では、ある科目の中でそれぞれの目標を持っているわけです。その中に視聴覚教材も入ってくると思います。

私は、前に北海道大学で「体の科学」という番組をつくりましたが、その素材を利用して、自分で新しく20本分つくり直しました。これを授業の一部に取り入れて、科目としての目標に向かって生かしているという形です。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

今まで発言された方を見ますと、みんな大学の方なんです、放送局の方、今後の取り組みについてお考えがあればお伺いしたいんですが、どなたかございませんでしょうか。

○東海ラジオ（伊藤英太郎 報道制作局プロデューサー）

第1分科会でお話をさせていただいたんですが、きょうご提案したくて、言い残した部分がございますので、もしそういうことが可能ならば、やっていただきたいということが一つございます。

私ども、ラジオをやっておりまして、ラジオに向くテーマ、向かないテーマというのがあると思うんです。過去に私どもが公開講座に参加させていただいて、シンポジウムに初めて出ましたのが金沢です。それ以来、前例からの資料をずっと見ておりますと、テレビではさすがに理系の番組が非常に多うございます。ゆうべ、宿で数えましたら50幾つございます。ほんの少し文系がありまして、どちらにもつかないというものもございました。

例えば、私どもがやりました「健康づくりの科学」などというものは、体の面からの科学と、心理的な面から教育学部の先生のおやりになったもので、そういう講座はどちらにもつかないものと分類しました。これは少ないわけですが、ラジオに向くテーマ、向かないテーマというのがあるんですね。

なぜ私がこういうことを感じたかといいますと、実は、去年バイオテクノロジーをやりました。勉強のためにバイオの本を読み始めて1ページ半でとまったと言ったら、皆さんに笑われたことがあったので、ご記憶の方もあるかもしれません。それで実際に取り終えてみまして、やはり難しいと思いました。1日に行いましたディレクター会議でもその話題がちょっと出ましたが、中には、理系だからラジオに向かないと、私は思っていないというディレクターもございました。

全国の大学でいろいろおやりになっているんですが、私たちはこういう難しいテーマを与えられて、こういうふう克服した。こういう工夫をしたら、こんなにうまくいったということを含めて、今までの過去のものをいろいろ分析して、ある程度の指針みたいなものを与えられる研究をしていただけると大変ありがたい。

一つだけ、おもしろいのが出ましたのは、琉球大学が、ラジオで8個しかないのに、理系を4回やっていらっしゃる。琉球放送の末吉さんが毎年、ディレクター会議に出ますと、難しいと言って首をかしげたり、嘆いたりしておりましたけれども、実に4回やっていらっしゃいます。そんな事実もございます。それはなぜかということ、学部の持ち回りで理系の順番が続いているということでございます。

そんなところからも、持ち回りでテーマを決めて、強引にラジオに理系の番組を押しつけるというのは、一体どういうことなんだろうということも起こってくる。これはそれぞれ大学にご事情もございましょうから、あながち「それはやめてくれ」とは申し上げられませんが、だったら、どうしたら理系の番組もラジオでうまくできるかということを、本当に教えていただきたいという気もいたします。

もし、研究テーマのときにそんなものがお願いできるのであれば、お願いしたいと思いま

す。これは実は、ずっと前に書きましたものを、民教協の井手さんにお出ししたことがあるんですけども、お願いできればと思いまして手を挙げさせていただきました。

○民間放送教育協会（井手定利 プロデューサー）

先ほどから、生田先生も含めまして、第1セッションの大学の知的構成と放送局側の協力という点での接点ということが出ております。廣瀬さんの方からは、余り蓄積がないというところがありますので、蓄積がない例ではあるんですが、こういう試みをやって、こういう結果になったということをちょっと関連してお話しさせていただきたいと思います。

きょう、今江先生がおいでになっておりますけれども、5年ほど前の熊本のシンポジウムのときに、私の方から提案して、大学でも使えるようなつくり方を模索しようではないかということで、センターにお願いしまして、いわゆる普通にやったものと別に、今江先生のご専門の野菜の植物の分類でもう1本つくって、それをシンポジウムにかけろということをやりました。大学の学生とか皆さんに見ていただくということもやりました。

今江先生のご専門の分野で、これはもう普通のフリップがあって、先生が机の前に並んでという形ではなくて、スタジオに野菜をたくさん並べまして、それを今江先生が一つ一つ切りながら、これは一体何かとか、何という植物に属するかという。これは今までのパターンを破るもので、視聴をした結果、こっちの方がおもしろい。

つまり、今江先生の専門の中でやったのがおもしろいというのは、1項目出てきます。それは発見があったということです。先ほど第2分科会で言われた第4の柱の中で研究が足りないという。その辺まだ、今、視聴者向けの視聴率を稼ぐ線と、大学で活用できる線というのは、両方あった方がいいと思いますが、どこかの接点で、やっぱり視聴者が、なるほど先生の専門で自由にやってもらったのは、おもしろいという発見が一つ出てくるんですね。ですから、可能性はまだあるというところで、5年前の報告ですけども、ここでちょっとご報告させていただきました。

○司会（菊川）

ありがとうございました。ほかに何か。

○熊本大学（今江正知 教養部教授）

名指しでさらしものになったからとあきらめて、恥をかいてしゃべります。

きのうからずっと話をいろいろ伺っていて、だんだんわからなくなって、私、大体単純な人間ですから、物事を単純にしか考えません。今、井手さんに私は非常に腹を立てました。

「台所の科学」というテーマで、教育学部の主任の先生がいつも世話になっている人だから断れない。だから、話しましょう。何の話をします。二遍話してくれ。嫌だと断りましたが、野菜の話をしろというわけです。

野菜というものは、自然の植物で人間がつくり上げたものだよと、その意味でこれは文化だ。人間が長年、汗と涙で築き上げてきたもの、磨き上げてきたからという話をしますということにしました。そしてその後で、もう一遍シンポジウムでどうこうだから大学と放送局の違う立場でと言われたけれども、私に言わせれば、メディアは大体たかが知れているし、それを映像にするディレクターは同じ人間です。同じ人間が両方で知恵を出したら、大体変わりばえのしないものしかできないのは当たり前だと思いました。

もう一つは、「野菜の形態学」というのをつくったんです。要するに、みんな、野菜は食べ物だと思っていて、決して生き物だと思わない。生き物屋としては腹が立つ。生き物であるからには、ちゃんと体に規則制がある。人間の手に5本指があるようなルールがある。ジャガイモは茎で、サツマイモは根っこだというのを、試験の問題のために覚えているからおもしろくない。ちゃんと根である証拠、茎である証拠、それぞれに全部あるんだからというところ。

ただ、こんな学問は、そんなに新しい学問じゃありません。明治時代には大体解決していたことだけれども、人間は食べ物だと思っているから、毎年学生に講義をするときに、わいわい言ってどやしつけて教えないと理解できないという部分は、学問の専門性なのか、一般性なのかという問題です。

僕は、放送公開講座というのは、視聴率は高くないといかぬと思います。高くなるべき努力を我々大学人はしなければいかぬと思います。そうでなかったら、時間とエネルギーと何とかの浪費です。そしてその中で、井手さんが格好よく言われた何かの発見をどれだけ入れられるか。数量化をして、きちっと話を順序立てていくのは、学校の講義でしなくてはいかぬことですが、その順序の段階全部を放送の中でやったら、時間が足りないのは当たり前です。ある部分はすっ飛ばしていい。理屈の細かいところは飛ばしながらも、最後の答えの間違ひのないところに行く話をきっちり押さえる。そんなことで何となく、放送講座の世話役をばかみたいにすぐ押しつけられるわけです。

きのう、工学部の田坂先生も随分さらしものにされたなと思って、私、同情して見ていました。あの場合、僕は、原発は必要であるという先生の主張を根本につくるべきだと思いますし、ディレクターの方がそれを気に入らないんだったら、先生が説明するのに困るような質問をする。「こうこうだから、私は危険だと思いますが」と言って、説得できないものをつくったときに、そこでかみ合うことができるので、それができなかつたら、環境問題の中の一環として、大学が計画した中での安全性という部分でつくっていいんだと思います。

それを何となく細かいことなしに、ただ、「あれは危ない、おばけだ」と言っている部分があるなら、「そうじゃない」という形で新しい視点をつくる。確かに放送は、45分の中に絵が入ってという短い部分でありますけれども、その筋道の中さえきちんとあつたら、筋道全部をその映像の中に入れなくたっていいんじゃないか。

僕は、これを熊大では総合科目に使っています。熊大では3年生相手に総合科目を開講しています。そして何人かの先生が、ある一つを中心テーマについてお話しをしていくということですのでいきますから、そのときに、しっかりした格好でつくった絵なり、話を、45分にぎゅっとやっているものを無理やり見せつけて、それを無理やりどれだけ受け取ったかを書かせるという作業をさせて、その後で話をするというふうにしていけば立派な教材になるし、それから同じ絵から幾らでもものがとれると思います。

以前、熊大の理学部の生物教室で、たしかどこかの賞をもらいましたが、カエルの発生と言う16ミリの10分ぐらいの映画がありました。カエルの卵が受精してから割れていくという絵を10分ぐらいの中で丹念に撮っているんです。その間に色つきのリメイクができましたけれども、もとの白黒の方がよかったと思います。これは小学生向きの理科教材ですが、

これを大学ですっと使っていました。実際に速度を変えて、卵が割れていく過程というのは、大学生が見ても、小学生が見ても同じ現象であるわけです。そういうものをしっかりつかまえて番組がつくってあれば、見ている方もおもしろいし、授業の中で幾らでも使える。ただ、熊大の場合は、総合科目という受け皿がある。受け皿の中で使うということを決めて、それを使ったやり方の中で一応認められましたから、その後の「音と人間」というのも4単位抱かせる。ことしの「熊本城を高くする」というのは、総合科目でやっていたのをつくったら、今度は逆に、「水と人間」なんかで苦労していたことをもとにしてから熊本城の番組をつくる予定をしました。

熊本城というのは、熊本の人間に誇りなんです。どこがいいかって知らんのです。あれがいいと言います。立派なものだって。どこがいいか全然わからない。だけど、何で尾張の人間の清正公さんが熊本まで来て城をつくったかというようなことも含めて、なぜあそこにあれだけの城をつくったのかという中には、太閤の天下統一云々もあるし、薩摩という国がいつまでも逆らい続けたという全国の中の情勢もあるし、そういうものが、あそこに城をつくらないといかぬところまでにいっぱいあるわけです。なぜ加藤がつぶされたかだって、何となくつぶされたということではなくて、なぜつぶされたか。その後になぜ細川が入ってきたかなんていうこと全部ひっくるめて入れるわけです。それは、絵として45分で終わる。その先に広められる話は山とある。その広められる話が、中に入った土台をつくるつもりでつくれば、結構視聴率も稼げるだろうし、後からの教材に使いやすいということで、ことし「熊本城」をつくりました。

そういう意味で、単なるお国自慢の、公民館の教養講座とは違うと思います。だから、熊本城は立派ですよ、清正公さんは偉かったですよということに非常に近いところで話をしておきながら、そここのところの目配りをどれだけするか。そしてまたディレクターが口の多い男で、何か言うと、ああでないか、こうでないかとすぐに質問をする。「しゃかあしい」というくらい質問をして、どうこうという格好で仕上げるのができて幸いだったと思っていますけれども、どこか私の考えている話と、きのうからきょうにかけて話がずれているような気がするので、教えていただけたらと思います。

○司会（菊川）

ありがとうございます。ある意味では、相当本質をついた話だったと思うわけですが、大分時間も迫ってまいりました。制作側のご意見が余り出てきませんでしたので、第1分科会の司会をされた栗田さんの方からご意見をちょうだいしたいと思います。

○放送教育開発センター（栗田博行 放送教育開発センター制作部長）

今の熊本の先生のご発言を大変興味深く伺いつつ、実は理解が間違っているかもしれないというふうに思って質問するんですけども、昨日の名古屋テレビさんと名古屋大学のあの実践の中に、大変すぐれた制作スタッフ内部のヒューマンリレーション、番組というものをづくり出すときに必要なデモクラティックな関係が見事に生きているなというふうに思いました。

ああいうコミュニケーションの蓄積が放送が問われる行動問題で、最近マスコク紙上を大変にぎわしましたけれども、実は放送が不特定多数社会を背景にしているということは、必

ずああいうタイプの緊張を抱えて、内部ですべての番組が動いているわけですね。そういう意味で、実は田坂先生ご自身が、私は推進論者として区分けされるかもしれないがとおっしゃいつつ、ああして梅垣ディレクターのいわば漠然たる生活人的な理論、律義な部分に根差している部分も随分含まれてはいるんでしょうが、あれだけの否定論というか、きちんとチームが含めたことに田坂先生の姿勢のすばらしさも感じましたし、同時に、梅垣ディレクターのきちんと言い分を出していく姿勢、おろそかにしない、先生の主張にひたすら映像化の機械的機能を努めるのでは決してない。それによって、推進論、必要論をしっかり持っていらっしゃる論者である先生と、実は疑問を決して捨て切らないディレクターと、どうやら司会者の成田さんもそんな立場を最後まで持っている。この一見普通の常識では、分裂し対立しと見えるスタンスを維持し合ったままでき上がった番組というのは、大変意義深い成果ではないかと感じたんですが、今の先生のご発言は、それにエールを送られたのか、それとも何かご疑問があたりだったのか、ちょっとご質問をしたいと思います。

○司会（菊川）

手短にお願いします。

○熊本大学（今江正知 教養部教授）

私は、ああいうつくり方を賛成だと思います。よくあれだけ話をされたなど。だけど私は、田坂先生が大変だったと思うのは、あの程度でしゃべること、例えば、さらしものにされる役割を引き受けられてきつかったことだろう。僕は2本つくらされて、そしてこっちがいい、こっちが悪いというのをそこに映されて、5年前に討論されましたので、ああいったことになる大変なんです。

というのは、我々大学の教師というのは、しゃべるのが上手で、ちゃんと納得させているという妙な思い上がりがあると思うんです。そのくせ、講義でしゃべっているときにわからぬ学生がおると、「あいつ頭が悪いから」とぼっと悪口を言う。頭が悪い人もわからなければならないように話をするのが。どれだけ大変なのかというようなことは、むしろテレビの制作現場の方の方がはるかに知っておられる。

私の恥を言いますと、一番最初に「水と人間」をつくったときに、こういう表を出してくれと言って出しました。きれいにちゃんと表を出して説明しました。撮り終わった後でディレクターが言いました。「先生、そういう話をするなら、ここここの数字は赤い字で書いておけばよかったね」。僕たちは、印刷物の表というのは黒一色で刷るという世界に住んでいるものですから、カラーテレビの放送だということは何十遍聞いていても、その中で赤い字を入れてフリップをつくれればいいということは思いつきもしない。

それから、先生たちに、大体あなたのような人相の悪いのはブラウン管の真ん中に映すと、みんなの精神衛生上悪い。それよりも石垣を映した方がはるかにきれいなんだからという悪口を言う係も私がしました。

ただ、最後ちょっと悪口を言いますと、最後の女の人は怖いと言われた先生のつらさを感じます。というのは、あのときに最後に、「先生が理路整然と言われるから、私は反論できずに、はい、はいと言っていました。しかし、心の奥底にどうしてもやっぱり不安があります」という言葉が出てきたら、僕は両手で万歳をします。ただ、そういうふう言われな

かったのが、僕はちょっと気になります。

○司会（菊川）

それでは、今までの討論を受けまして、コメンテーターの方からコメントをお願いしたいと思います。では、まず濱野さん。

○放送教育開発センター（濱野保樹 放送樹開発センター助教授）

総括と展望ということですので、私は展望について、二つの事例を挙げてコメントにかえたいと思います。

既にご存じのように、今回、アメリカ政府の副大統領になりましたゴアが、1991年12月にハイパーフォーミナンス・コンピューティング・アズコミュニケーションというプロジェクトをぶち上げました。5年間で教育利用のみに限定したプロジェクトを3,600億円で実施しています。今年度施行されておりますが、それは映像が、全く圧縮しなくても流れる非常に分厚い容量を持った光ファイバーを全国にまきまして、まず大学からネットワークしていった小学校までおろして、もちろん音声もできますが、無料で映像が完全に何の抵抗もなく流れるネットワークをつくるということで、最終的には2015年までに、その口が必ず家庭に来ているということを大統領の選挙公約で言っております。

どういうことかといいますと、通常教育機関がすべて遠隔教育機能を持つということですから。遠隔教育ということを経営しなくても、あらゆる教育機関が遠隔教育の機能を持つし、住民から遠隔教育の需要があるということでもあります。もちろんアメリカにはこれまで、電波を割り当てるときに、特別にITFSという教育だけに余計にとっておくという制度がありましたから、ネットワークを教育利用するという伝統があったわけですが、完全に無料で、公的教育機関に対しては、ただでネットワークを使わせるというインフラができつつあるわけです。

もう既に2月28日の日経新聞に発表されておりましたように、郵政省でも同等のプロジェクトを考慮中でありますから、日本の大学も無料で映像を発信できる可能性がかなり高い。もちろん、放送法とか通信法の規制緩和がまたれるわけですが、2月28日の日経新聞に、インフラストラクチャーのために道路公団並みの公社をつくって、無料で大学にネットワークを提供するという形を検討中でございますから、逆に、住民側から遠隔教育のサービスを要望される事態が、必ず近々のうちに日本の大学も来るという情勢になってきたということでもあります。

二つ目の事例は、制作にかかわることでありまして、たまたま私訪問したことがあるんですが、ロサンゼルスの下に、オレンジパンピーミュージックチャンネルという、一番ホットな話題の中心の放送局があります。これは1990年にできた放送局ですが、ディレクターいない、カメラマンいない、演出家いない、プロデューサーいない、記者いない、何もいないんです。新聞記者のように全員が取材から何から全部やって、80人で24時間のローカルニュースを放送している。

要するに、アナログ編集機がなくて、パソコンで全部編集しているわけです。公開講座の研究テーマの一つとしてデスクトップ・パブリッシングが挙がっておりますが、デスクトップ・ビデオが可能になったために、たった80人で24時間のローカルニュースがやれる。同じ

ような放送局が五つできましたし、フランスとドイツに二つできました。今後郵政省から認可を受けました東京のUHFの14番、OCN形式でやります。アナログ編集機が1台もない。卓上でワープロを打っている同じコンピュターでビデオを編集してしまう。

たまたま私が主査をやっています放送教育開発センターのマスメディアの研究のテーマの一つが、教育用デスクトップ・ビデオシステムです。先ほど阿部先生がおっしゃったような形で、実はこの部屋でパソコンでも映像が編集できるんです。そういったものを教育用に簡単に先生方が自分でできる。デジタルで編集して、1回しかこすらないですから、非常にクリアな映像をだれでもが撮れるレベルになってきた。日本でも、その放送局が現在計画中であるということで、インフラできて、だれでもが映像化できる。

もちろん、つくるノーハウはすごく重要ですが、その点でまた先生のお話に戻りますが、残念ながら日本では、映像系の学士号とかいうのがないんですね。これは1980年の古いデータですが、アメリカの映画協会が調査した結果によりますと、映画学士号をとれる大学がアメリカで227あります。テレビ学士号をとれる大学が257ありまして、毎年4万5,000人の型が映像の専門家を目指して勉強しています。ご存じのように、日本の国立大学には一つもありません。

そういった伝統の上で、どうつくるかとか、どうやって映像で表現するかというノーハウがたまってきていないのが現状でありますから、放送教育開発センターは、唯一たまたま放送とついていますが、映像とか、ほかの音声といった形での表現のことを研究しなければならないと思います。

これまで公開講座が蓄積してきた長い歴史といっても、こういったインフラの整備は、通産省も出すと言っていますので、必ず国立大学とか高校とか中学で実現されると思います。映像が発信できる回線がただで使えるようになるわけですから、公開講座のノーハウは、そういったところで非常に重要な役割を今後果たしてくると思いますし、郵政省が考えているゴアと同じようなデータスーパーハイウェイと言われるものの重要な利用目的に遠隔教育が入っているのは当然で、それが非常に強調されておりますので、公開講座のノーハウがかなり注目されていると思います。

以上

○司会（菊川）

ありがとうございました。

では、続きまして今津先生、お願いします。

○名古屋大学（今津孝次郎 教育学部教授）

二つのことを申し上げたいと思います。

その一つは、アイデアといいますか、提案でございます。先ほど来、先生方のお話をお伺いする中で、また今の濱野先生の放送公開講座のノーハウという言葉もございました。このシンポジウムが10年、講座が開始されてから15年を経て、いろいろな知恵あるいは実践が蓄積されてきているにもかかわらず、委員の交代等で継続性がなかなかうまくいかない。蓄積されたら、またすぐ消えてしまうのではないかというお話が何度もございました。

そこで提案でございますが、大学放送公開講座のハンドブックをつくってみるというのは

いかがでしょうか。ぜひ編集を放送教育開発センターにお願いをしたい。理由は、今申し上げましたように、きょうの討議の中でも出てきた、何度か蓄積されている経験、実践、理論、ノウハウを、次に担当していただく方に伝えたいということと、もう一つ、実は先ほど名古屋テレビ社会情報部長の清水さんからご紹介があったように、現在名古屋市の生涯教育センターで「大学放送公開講座展」の展示を開催中でございます。

実はあれも、このシンポジウムの準備を進める中で、展示会をやろうじゃないかという思いつきが出まして、そのうちテープやビデオやテキストだけでは物足りないから、歩みの記録をきちっとつくろうということになりまして、実は大急ぎで私がパネルの原稿を書く羽目になってしまいました。そのときに一番痛切に感じましたのは、ハンドブックが欲しいということでした。

一番利用致しましたのは、放送教育開発センターから出ている便覧でございますが、若干ミスプリとか記録の誤り等がございまして、急遽パネルをつくった後で字を直したりする羽目になったんですが、それは別といたしまして、そのほかに、このシンポジウムの毎回の記録などを引っ張り出しまして、資料を大急ぎで調べまして、文章を何とか間に合わせてパネルをつくり上げたという経緯の中で、やはりハンドブックが欲しいということでございます。

ちょうど10回記念ということもございましたので、これから1年かかって2年かかってもいいと思うんですが、次の新たな展望、展開に向けて、これまでの15年の歩み、あるいはシンポジウムの10年の歩みを踏まえて、いろいろな方々に執筆していただいて、これはできるのではないかと。例えば書名は「大学放送公開講座—その歩みと展望」とか、かたいものでよろしいかと思いますが、ぜひ市販のベースに乗せていただきたい。

そんなものが売れるのかという話ですが、すぐやりたいという大学が23大学あります。これから検討したいと言う予備軍が268大学、計300大学あるんです。これに1大学3冊くらい買っていただくと、すぐ1,000部になる。これは販売可能だと思います。そういう提案が一つございます。

それからもう一つは、実は今回、名古屋の方で聞かせていただくということで、「知の構成と放送—学術研究と番組制作の対話—」ということで、先ほど来話題に挙げられております原子力工学の田坂先生が大変ご苦労されて、仕掛けました我々としても申しわけないと思っておるんですが、田坂先生から、昨日、対話ということが非常に重要だということに気づきましたと、別に打ち合わせをしたわけではないんですけれども、我々の掲げましたこのテーマを支援してくれるようなご発言をいただきました。そして昨日からきょうにかけて、いろいろな立場の対話が積み重ねられてきたのではないかと思います。

その中で一つ、私が感想というか、意見として思っておりますのは、番組制作と印刷教材の関係の問題です。これも一つの対話だろうと思うんですが、実は、きょうの午前中の第1分科会の方で、大阪大学の太田先生が「原作と脚本と放送」ということをおっしゃいました。放送されるものは原作そのものではない。やはり見やすい、聞きやすい、わかりやすいということで、ある種の台本、脚本が書かれて初めて放送として生かされる。改めて学術研究の立場、大学の立場は何かということを考えますと、私は大学の人間ですので、大学の立場で申し上げますと、恐らくこれは原作を書けばいいということだろうと思うんです。じゃ、脚

本はどうか。これは放送局のディレクターの方、プロデューサーの方と対話を積み重ねる中で、共同してつくり出していくものだという気がします。

これまで印刷教材というのは、原作を指しているのか、脚本を指しているのか、そのあたりがややあいまいだった。ある人は原作の方に、ある人は脚本の方を言うという、そこをやっぴりはっきり分けて、大学ができることは原作を書く、つまり文字の世界に徹するべきだろうと、私はだんだん自分の意見がかたまりつつあります。放送局の方は、その原作をどういうふうにして脚本にしていくかということに放送の論理を主張される。そこで対話があって、初めて放送ができて上がる。それが、地域住民にとっての学習活動を支援する一つの大きな生涯学習の機会だというふうに感じております。

実は昨日、第1セッションが終わりました後のパーティーの席で、大阪大学の水越先生とそのことが話題になりました。よく考えてみると、映画の世界では、小説という原作をどういうふうに脚本化して映画化するのかということの格闘の繰り返しではなかったのか。いい例があるじゃないかと水越先生はおっしゃるわけですね。原作はつまらなくても、いい脚本ができて成功する映画もあれば、原作は素晴らしいんだけど、脚本が失敗して、映画としては愚作に終わるという場合だってある。いろいろな例を我々は持っている。まず、そこらあたりの分析から始めてみたらどうだろうか。少し遠回りかもしれませんが、そういう仕事もこれからの大きな基礎研究なのではないか。

同じことはラジオについてもいえると思います。原作を脚本化してラジオドラマにする。そこに何かラジオのメディアの特性を生かした脚本が考案されているはずだと思います。そういう意味で、きのうときょうにかけまして、田坂先生に、対話ということの重要性に気づきましたと言っていただきまして、我々もほっとした次第でございますけれども、一つ例を挙げますと、番組制作と印刷教材の対話ということも重要ではないか。これは私の感想でございます。

以上でございます。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

次は井手さん、どうぞ。

○民間放送教育協会（井手定利 民間放送教育協会プロデューサー）

私どもで、きょうのシンポジウムに向けまして、今実施している放送局に、現状と将来について何でも書けというところで意見を聴取しました。その意見も含めまして2～3発表させていただきます。

一つは、放送期間がほぼ15本で3カ月です。つまり、今までの再放送なり、あるいは大学で前につくったものを含めて、半年ぐらいを目標として放送ができないかというのがうちのOBの意見です。これは例えば、映画とテレビとどこが違うかという質問に対して、テレビは毎日出てくると答えた人がいて、うまい答えだと思いますけれども、再放送なんか使うことによって、とにかく毎日出ていく。地元への浸透度という意味でちょっと欠けるところがありますので、まあ1年でできれば理想的なんですけれども、そんなところが私どもの意見として一番多く見られました。

それから、加藤所長からきのうご提案がありましたけれども、テーマのことが出まして、私どもとしては一つの明るさを見る思いもございます。前にも、私どもの事務局で何かつくれという要望があったりして、つまり、今4年間大学で使うということで動いておりますけれども、ソフトの利用拡大ということでは、これからせきを切ったように要望が出てくると思います。図書館とか学習センターとか公民館、あるいはほかへの拡大ということに対して私ども何の異論もございませんので、再利用拡大の道は探っていきたいと思っております。

ただし、個人の段階で著作権というのはあいまいで、処理するのが大変でございます。これは法整備ということがどうなるのかわかりませんけれども、著作権を担当している文化庁あたりで、これからの発展、これだけでなく別の問題も含めて、教育的なものへの法整備体系をしていかないと、ちょっと私どもだけでは手に負えないところがたくさんございますので、その辺もあわせて要望いたしたいと思えます。

それからあとは、おとし、東京放送さんと私どもと一緒に、環境の視聴者調査をやったんですが、主婦の2人から、ある2本についてテレビを何回見てもわからぬという答えがありました。私はその作品は見えていないんですけれども、その番組も余りよくできていなかったのかなと反省させられるところもあったんで、終わってからインタビュー調査をしたら、全体としては大変わかった。ほかのグループに属してやっている主婦が、環境のことを話せるようになったという感想があったんですね。

ですから、15本なり18本の内容を決めるときに、主任講師の方なり、決める先生は、もう10年たちましたので、ぜひプロデューサー的な立場に立って決めていただきたい。単に持ち回りで先生がずらっと並ぶという講座は、視聴者サービスという点で、やっぱり放送局のセンスはおかしい。東北大学の萩原先生が経験から、せいぜい7人か8人じゃないかというある程度の線を出しておりますけれども、ぜひ主任の先生もプロデューサー的な性格を持って、ある程度強引に、独断的でもいいから、15本なり18本のところをびしっと決めていく。社会に対しての波及効果がまたそれで広がっていくのではないと思うんです。

その辺も要望いたしまして、以上で終わります。

○司会（菊川）

ありがとうございました。

長時間にわたりまして、この第3セッションが持たれたわけではありますが、放送教育開発センターの方でも、公開講座に関する共同研究プロジェクトがございます。その主査をおやりになっているお立場から、石田先生にまとめていただきまして、このセッションを閉じたいと思います。

○放送教育開発センター（石田幸平 放送教育開発センター教授）

きょうは、私どもセンターに向けて手痛い、全く本当のご批判をいただきました。例えば、各大学の実情を把握せず、縦にも横にも何にわからず、継続性もない、そういうことをやらせてきているのはセンターの落ち度である。確かにそうでありまして、各大学の研究成果が他の大学に十分生かされていない。次年度にも生かされていないということの責任の一端は私どもにあると思います。

ただ、今までやってきたことで、手前みそになりますが、例えば、双方向の教育というこ

とがどうして起こってきたかという、共同研究が端緒になっているわけでありまして、ただいまの共同ということは非常に重要ではないかと思えます。

4 本柱のテーマなどについて、私ども、これでいいのかということは、もう既に客員教授の先生方には申し上げてきておりますが、明後日、私どもの研究班では、これまで先生方あるいは放送局の方からいただいた研究テーマについて、今、今津先生から言われましたハンドブックですか、そういうことも疎めまして検討させていただきます。

それから、せっかくのお金を使っておりますので、共通教材ということで、どの大学にも共同利用していただけるような教材開発の研究も、センターが音頭取りになってやらなければならないと考えております。もちろん各大学の使い方は自由でありますけれども、そういうものを目指したいと思っております。

それにはどうしたらいいかということで、共同研究が基本にならなければならない。そして、客員教授というものを改めて強化する必要があるのではないかと。チームをつくって研究体制を強化したいというのが私の意見です。これがどうなるかは、明後日検討しなければならないことでもあります。

それからもう一つ重要なことは、民間放送教育協会の方からの申し入れもありますし、よりよい番組をつくっていくためにも、放送教育開発センターもその柱となって、お互いに共同研究チームをぜひつくって、この研究チーム体制を整えたいということです。

それからもう一つ考えなければならないのは、今までは、各参加大学に研究のテーマを出していただいて、余りやりたくないのに、忙しいのにやらせているというご発言もありましたが、本当にやりたい研究テーマというものを公募したらいいのではないかと。研究チームの方も、先生方が自発的にこういうチームでつくってやっていきたいということで、もっと活気ある研究体制をつくっていきたいというのが私の結論であります。

○司会（菊川）

どうもありがとうございました。

それでは、このセッションをここで閉じたいと思いますが、センターで、この公開講座について今後、相当長期的な展望に立ちまして、仕組みとか、あるいは研究体制とかを総合的に検討していきたいと考えておりますので、今後ともよろしくご支援のほどお願いしたいと思います。

それでは、これもちまして第3セッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

○総合司会

どうもありがとうございました。皆様、大変お疲れさまでございました。

以上をもちまして第3セッションを終わらせていただきたいと思います。

それでは、閉会に当たりまして、放送教育開発センター加藤秀俊所長からごあいさつがございます。

あ い さ つ

○放送教育開発センター（加藤秀俊 放送教育開発センター所長）

きのうから2日間にわたりまして、大変すばらしい討論をしていただきましてありがとうございました。四つほどのことを簡単に申し上げます。

まず第1は、何人かの方々から既にご指摘のあったことをございますけれども、この公開講座の研究活動をもっと活発にせよというよりも、研究活動の継続性を生かせというご指摘でございます。これは先ほど、研究開発部長石田教授ともども申されましたように、全くセンターの責任でございます。

ただ、言いわけがましくなりますけれども、もし数年前のこの会合をご記憶の方がいらっしゃるならば、かつてのこのシンポジウムは、各大学、放送局がそれぞれ10分ずつの持ち時間を持って、その年に実施したことの事業報告会のようなものであったと記憶しております。そこから少しずつ、せっかく大学人が集まっているのだから、研究発表会にしようではないかというご提案を申し上げました。にわかに変えがたいので、2～3年かじ取りをしましてここまでやってまいりました。したがって、今回のこの10回目のシンポジウムというのは、業務報告会というより、むしろ学会に近い色彩を持っている。その点の一つの進歩であるだろうと思います。

今、石田教授からお話しがございましたように、あの四つのテーマも、実のところ、大阪大会でしたか、センターの側で提示させていただいたテーマだったと思います。各大学からの自発性において出されたテーマではなく、この点は、大変失礼でございましたけれども、ご提案がなかったので、センター側で用意させていただきました。

もう一度触れますけれども、研究テーマにつきましては、石田教授を中心にしてテーマを公募させていただく。いい研究については予算も多少加えさせていただきまして、いい研究成果を上げていただきたいと思います。もちろん、そのめたのすべてのコーディネーションはセンターの責任でございます。

第2番目に申し上げたいことは、今回のテーマと、昨日の第1セッションの最初から、少し白熱的な論議のありました学問の世界と放送の世界の問題であります。放送のみならず、マスメディア全般と言ってもよろしいのでございましょうけれども、一方には大学の自治があり、学問の自由があり、あるいは憲法上保障された言論の自由がございます。しかし他方、憲法上の規定では、公共の福祉というものが重なってまいります。それに加えて放送法という法律がございます。大学の通常の授業は面接の通信でございますから、一切の自由の行使ができますけれども、放送法という法律にかかってまいりますと、学問の問題と放送の問題がぶつかる矛盾が出てくる。

この名古屋の大会は、その問題点への接近を設計していただけたと大変うれしく思います。たしか一度、テーマとして「学者の言い分、ディレクターの言い分」というので設計してみたいかがでしようかということを、何かのときに申し上げた記憶がございますけれども、それがこういう形で結実したことを大変うれしく存じています。

3 番目は、大学にとって公開講座とは何かという根本問題でございます。両方の分科会を往復して伺ってありましたら、担当教員の負担が重い。本来の研究教育業務に加えて、この放送公開講座がある。いかにもこれは重荷であり過ぎるというお話がございました。これは、大学としてどの程度に取り組んでいるかによって考え方が違ってくると思います。

昨日の飯島先生のお言葉をかりますならば、大学のエクステンションとして、正式にこれを大事な授業としてお考えになる限りは、学部教授会はもとよりのこと、評議会の事項としましても、放送公開講座担当講師に関しては、その実施年度並びに計画年度に関して、例えば3 こまの授業を2 こまに減らすとか、その間、非常勤講師で代替するとか、その程度の取り組みが大学にない限り片手間の仕事になって、そういう大学は、この公開講座の中からだんだん脱落していくのではないかと。これは大学の取り組み方に関する根本問題として、ちょっと反省させられました。これも大学の自治の問題でございますから、それは大学のご判断かと思えますけれども、そんなことを感想として持ったわけでございます。

それからもう一つ、大学群のことを開会のとき申し上げましたが、けさほど北海道大学の公開講座のスライドを拝見しておまして、大変感銘を受けたのでございます。北海道大学の広重学長にお目にかかりましたら、本来北海道のは、「北海道 大学公開講座」という名前でスターとしたそうです。それがいつの間にか、「北海道大学 公開講座」になってしまった。最初に地域名があって、その下に大学公開講座、こっちが本当。どこで文節を切るかということで、原点に戻って、北海道では「北海道 大学公開講座」という姿勢をとりたいという大変楽しいお話を伺いました。とりわけ、こうした転換期に立って、ちょっと訂正させていただきます。

それから第4 番目でございますが、先ほど、北大の阿部先生その他からご提案がありました。公開講座用に作成されたビデオだけが教材用ではございません。もちろん放送大学のビデオその他なんかも考えていいと思います。私どものセンターには、簡単でございますが研究用スタジオがございます。ここで、この4 月から実際に使用されることになるわけでございますけれども、昨年いっぱい、東京大学教養学部の英語の先生方が41人おられるそうですが、その中の17人の先生方が、学部学生の英語の授業のために、教室用補助教材を自分でつくろうというので、センターのスタジオをお使いになってビデオ教材をおつくりになりました。来年度もそれは引き続くと伺っております。我々の研究スタジオは、こうした共同利用のめたにあるわけでございますから、ここにいらしゃる先生方のみならず、各大学におかれましても、どうぞスタジオ等の共同利用施設は、ご遠慮なくお使いいただきたいと思うんです。

このスタジオのみならず、他の共同利用のための施設設備あるいは研究などにつきましては、非常に近い将来に、各大学に共同利用、共同研究の公募の書類を回させていただくよう、今手はずを整えております。詳細は、その書類が先生方のお目にとまりますように十分配慮してお送り申し上げますけれども、公開講座のための番組制作以外に、センターをどうぞ各大学の先生方使いまくってください。いささか使い度があるかと自負しております。

いずれにしましても、私どものセンターも、長いといえば長いんですけれども、この公開講座10周年、そして設立から15年という節目を迎えました。一つの大変な岐路に立たされて

いるところであります。昨日申し上げましたように、この公開講座が我々にとっての最重要課題、事業の一つでございまして、ここからいい共同研究がさらに生まれてきますように。

大変失礼なことを申し上げたかもしれませんが、大変楽しい会でした。先生方、本当にありがとうございました。(拍手)

閉 会

○総合司会

どうもありがとうございました。加藤所長から閉会のごあいさつをいただきました。

それでは、これをもちまして第10回放送利用の大学公開講座シンポジウムの日程をすべて終了いたしました。皆様、2日間にわたりしまして大変お疲れさまでございました。